文化財記録映画シナリオ

民俗は生きている

製作に至る経過

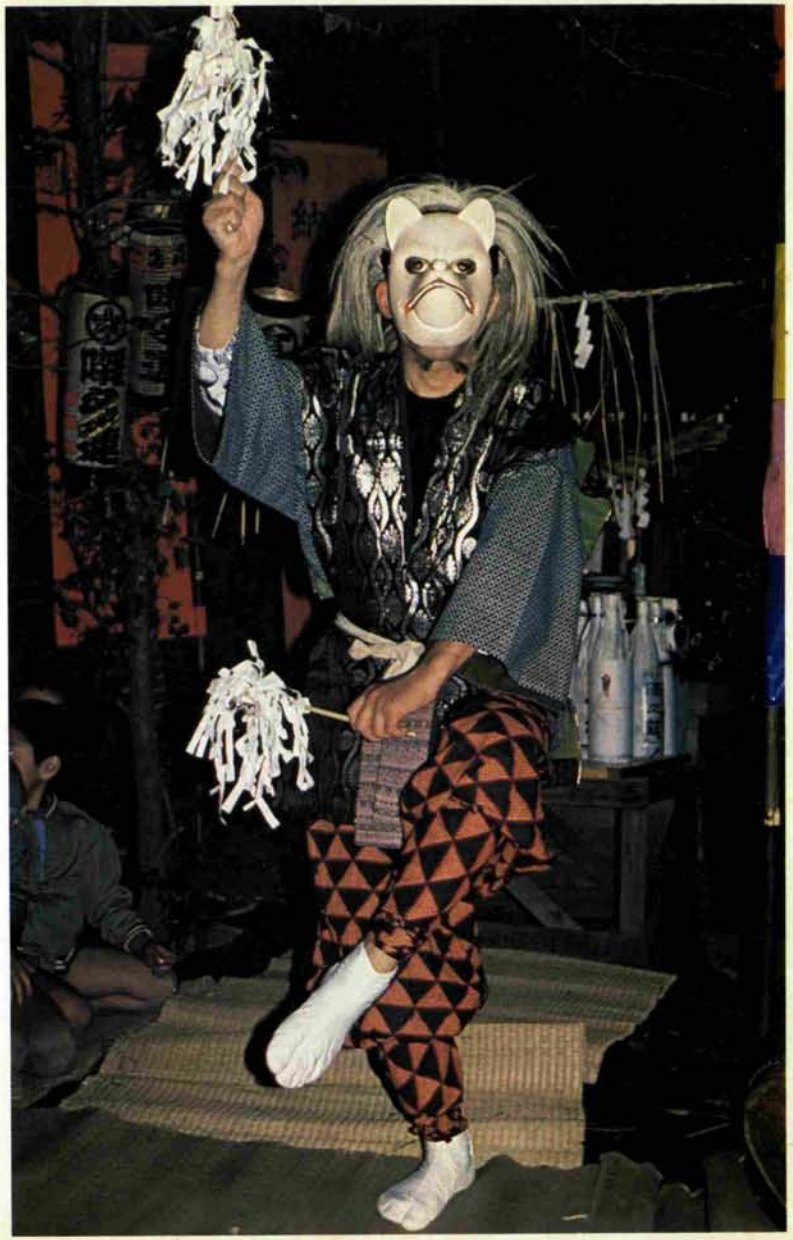
武蔵野の台地、多摩川にいだかれた世田谷に伝えられる年中行事、習俗等の民俗を無形民俗文化財として今のうちに出来るだけ記録にとどめたいと「民俗は生きている」は企画されました。

延べ一年六ケ月にわたり区内をくまなく探訪し、民俗、行事の発掘も行ないながら実にたくさんの住民の方々、大人から子供達までのおしみない協力によって撮影、製作されたものです。

このすばらしい人と人との触れあい、映像による記録が波紋となり、先人がくらしの中で築き伝えて来た文化、風土の中で生きぬいて来た知恵を原点から見つめなおし、明日への前進のよすがとなることを願ってやみません。

このような意味からも、「民俗は生きている」は今日の私達にとって大きな文化財であることの証かしとなりうるものだと思います。

世田谷区教育委員会



企画　東京都世田谷区教育委員会

監修　鎌田久子（成城大学教授）
森安彦（信州大学助教授）
稲葉和也（東海大学助教授）
田中隆之（世田谷区文化財資料調査員）

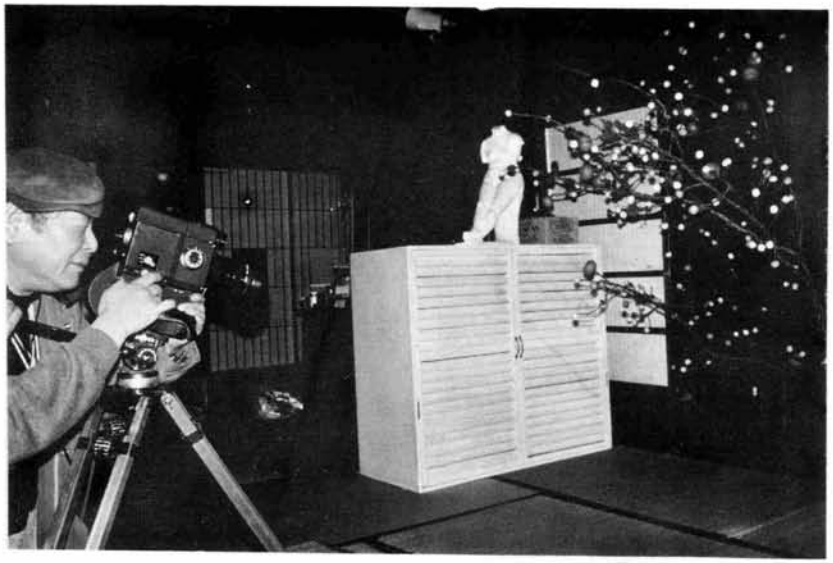
製作　世田谷を記録する会

製作・撮影　中尾駿一郎（日本映画撮影監督協会）
監督　浅野辰雄（日本記録映画作家協会）
脚本　浅野辰雄
中尾駿一郎
撮影　福沢康道（日本映画撮影監督協会）
ナレーター　高島陽
作曲・指揮　山下毅雄
録音　大田六敏（權の会）
ボーカル　チェリーズ
撮影助手　金中愛子
熊谷亮二

現像　ソニー・PCL

協力　世田谷区郷土芸能保存会
世田谷区民俗調査団
世田谷区郷土資料館

（写真は文化財係倉島幸雄が撮影した）



古民家の大黒柱に美くしく飾られたまゆ玉

クルリ棒（表打ち）を撮影する世田谷を記録する会のスタッフ

夏祭り本番を前にきびしい練習を積むお囃子連

初午の日イロリでオデンを煮て食べる

文化財記録映画

民俗は生きている

16ミリカラー（40分）

【解　題】　かって江戸近郊の農村だった世田谷の地域も、いまでは都市化の波に呑まれつつある。しかしここに住む人々の生活の奥には、むかしから自然をおそれ、あるいは自然と調和して生きてきた、くらしの節目節目の行事や、神仏への依頼や敬いからくる信仰や風俗習慣が残っている。

この作品は、年間を通して、こうした行事や信仰、習俗を、そのいわれ因縁にまでさかのぼって、こんにちの都会の周辺に住む庶民の心と生活のあり様を探求したものである。

【梗　概】　むかしは、一日は夕暮から始まり、暗い時は神様の時間、明るくなると人間の時間と考えられ、こんにちでも正月は、除夜の鐘で悪霊を祓い、初詣でをして神様に一年間のしあわせを願うしきたりが残っている。

正月の神様は先祖の霊で、祀り方は家々によって異なる。『陰（かげ）ぞなえ』の鈴木家の風習を描く。こうして、歴史をもつ、寺院、神社、家庭で正月を描き、世田谷の歴史にはいる。

今から約五五〇年前の世田谷城の復元図、当時の世田谷の庶民のくらし、そして招き猫の由来と井伊家の菩提所となった豪徳寺の雪の風情。

小正月のまゆ玉。むかしの生活をのこす飯田家の主婦は「まゆ玉も私の生きている間だけでしょう」と豊作祈願のまゆ玉を、屋敷内の神仏や座敷に飾る。

ドンド焼。もとは年越しの火祭だったが、いまは塞の神、道祖神を祀る小正月の行事。

節分。喜多見に残る『鬼やらい』と『大黒舞』の行事。鬼と大黒のいわれを語りながら、庶民信仰を変えていく歴史の流れに思いを馳せる。

二月八日の針供養。そして二月最初の午の日の初午、お稲荷さまを祀る行事である。子供たちは小屋をつくって、みんなで食べる。夜には里神楽とお囃子、江戸の風習がここには残っている。

御獄信仰の狼のお札が、畑に刺され、まよけを願う風習も残っている。

二月十五日はお釈迦さまの亡くなった涅槃会。和讃を詠唱し古い塔婆を焼く。子供たちの楽しみは、涅槃団子を食べること。

梅まつりと『代田餅つき唄』。六人搗き八人搗き、天保年間からつづく独自な伝承である。

雛祭りのいわれと、こんにち定着している風習との関係。

四月、桜が満開となる頃、お釈迦さまの誕生を祝う行事が催される。そして五月、花が咲きかわり、空には出世魚の鯉のぼりがひるがえり、悪霊を祓う菖蒲が飾られる。

筍の季節。等々力では念仏講がひらかれている。この講はさらに相互扶助組織へとひろがっている。

喜多見に残る『まむし屋敷』の斉藤家は、江戸時代から、まむしよけの本家として有名だったところ。その治療の仕方や呪文などを紹介する。

麦の秋。麦刈りと、いまに伝わる棒打ち唄。むかしの情景を再現してみせる。

世田谷では珍らしくなった田植えの風景、もう来年はなくなるという。

七夕祭。芋の葉の露で墨をすり、短冊に字を書き、天の川の見える星空をねがうが、もともとは、雨の降るのを願う、農業の祭りだったのである。

七月十七日、大施餓鬼。餓鬼世界で飢餓に苦しむ生類に飲食をほど

こす法会。

『おとろとぼし』墓のすべてに灯明がとぼされ、僧侶が読経しながら廻る。

多摩川の夏の『川狩り』。投げ網をうって、地域ぐるみ、魚のてんぷらを食って、協同体の連帯を強める楽しい風習である。

熱気をはらんだ夏の夜のお囃子練習。明治二十七年に瀬田ばやしから伝えられてきた喜多見ばやしは、地域の支持もあって、農家や蔦の若い衆が後継者として加わり、毎夜の猛げいこ。

八月一日は天王さま夏祭の宵宮。五つの町のお囃子連中が集って技を競う。それを娯しむ地域の人々。むかしから、こういう一夜が生きる力をよみがえらせ、生活の励みになったのである。翌日は例大祭。神前舞や湯花神事が昔ながらに行なわれる。

四年に一回、八月十六日に奥沢の浄真寺で行なわれる『お面かぶり』。人間死んでホトケになると、阿弥陀様を中心に諸仏諸菩薩が迎えにきて西方浄土へ旅だっていく、という浄土宗の教えを、形にあらわしたものである。二十五菩薩のお面をかぶる善男善女をはじめ、数百人の参加者が、数千人の観覧者を前に、けんらんとくりひろげる『お面かぶり』。江戸以来のながい伝統をもつ行事である。

秋、とりいれ。世田谷から田んぼはほとんど姿を消したが、稲作にともなう習俗は人々の中に残っている。奥沢神社境内では、わらの大蛇つくりが進められている。二百五十年前に、厄除けの大蛇をかついで奥沢新田を巡行し、疫病を退散させてからは、毎年つくられているもの。秋の大祭になると、この大蛇をかついで、境内から町へとねり歩き、そのあと、鳥居に巻きつかせて厄除け開運の象徴とする。

十五夜、畑作の収穫感謝。この日だけは供えものを盗んでもよい、という子供たちのスリルも、今はなくなってしまった。

民俗芸能のうち、お囃子だけは、それぞれの町に残されているが、その中で等々力囃子は、笛の名人と謳われる高橋福蔵さんを中心に十四曲のレパートリーをもっている。映画ではその中の『宮昇殿』が披

露される。折しも、四百八十年の歴史をもつ、玉川神社の豊年感謝の秋祭りで、みこしをかつぐ者の間には異常な興奮がみなぎり、神との合一を体験することとなる。

下馬の町辻のお申講。ささやかな祭りの中に、昔の農村社会をしのばせてくれる。

給田小学校では、子供たちが、烏山囃子を習っている。まさに滅びそうになったとき現れたたくさんの後継者である。世田谷区の芸能大会でも晴の舞台が与えられた。そして数々の芸能が披露され、ボロ市の舞台に引継がれる。

四百年の世田谷の歴史、そして庶民の生活史を物語るボロ市。ここには今でも三〇万人の人々が集まる。正月の準備をする人。昔をしのぶ人。そして古いなかに、明日を見出そうとする人。まさに、世田谷の民俗は、人々とともに生き続けている。

今も残こる世田谷の民俗行事

○　現在行なわれている
△　行なわれているところもある
×　今は行なわれていない

映画のシーン	民俗・年中行事
大晦日・十二月三十一日	
除夜の鐘（桜一丁目　勝光院　曹洞宗）―　大晦日の夜は除夜の鐘を聞いて寝る	○迎春準備―　神飾り、家の内外の清掃、おせち準備
	○年越そば―　夕食・夜食にそばを食べる
	○ミソカバライ―　大晦日の夕食後ご幣（へい）で家族中の体を祓い、ご幣を辻又は門口に立てる
	○仏名会（ぶつみょうえ）―　大晦日の夜行なわれ、三世の諸仏の仏名を唱えて罪障をざんげし消滅を祈る越年法会

正月

初詣（宮坂一丁目　世田谷八幡宮）―　鎮守や菩提寺へ初詣

正月家例（桜上水五丁目　鈴木家）―　神供（かみそな）え（家々によって異なる）、元旦の朝年男が正月の神様である先祖の霊に大根と芋を供える

元旦

△**若水**―　朝、若水を汲んで神仏に供える。若水の福茶（コンブ、黒豆、サンショウ、梅干などを煮出す）を縁起を祝って飲む

一日～三日

○**祝膳**―　雑煮餅（家々によって入れるものが異なる。大場代官家例年中行事（文化年間）は、大根輪切りと里芋の味噌汁煮）

一日～六日

○**正月飾り**―　門松、輪飾り（標縄（しめなわ））、神飾り

○**年頭の挨拶**―　氏神、菩提寺へは三ヶ日に行く習わし

×**門芸人**―　三河万歳、猿廻し、獅子舞、春駒（馬の頭の作り物を持ち、一軒ごと歌ったり舞ったりする）、俵ころがし

二日

△**初荷**―　商家の荷　農産物の初荷は四日

△**書初**―　今はあまり行なわれていない

四日

○**坊さんの年始**―　檀家へ年始の挨拶廻り

六日

○松納め ― 正月飾りを取り除く

△六日年越 ― 七日正月の年越でそばを作って食べる。

○寒の入り ― 油揚げを食べる

七日

○七草 ― 七草粥を食べる、七草爪（邪気を払おうとして七草を水に浸して爪を切る）

十一日

○蔵開き ― 鏡開き、鏡餅を割り汁粉に入れて食べる

×アボヘボ（粟穂稗穂） ― ニワトコの木でつくり作神に供える（千歳地区、砧地区）

個人の家では消滅したが喜多見の氷川神社では新年の縁起物として作られている

十四日

×成木責め（木呪） ― サイの神の焼け残りの竹で果実の木をたたくと豊作になるという

まゆ玉（用賀三丁目　飯田家）

― 柳、カシ、ケヤ木、ナラなどの枝に、うるち米の粉でつくっただんごを差して神に供える（消滅寸前）

サイの神（鎌田四丁目　田圃） ― 塞、斎、歳とも書き、どんど焼、左義長とも

いう。正月の諸飾りや古いお札を辻の広場や神社の境内に子どもが前の日に集めて準備し、朝早く焼きこの火で餅を焼いて食べた。今は砧農協一ヶ所で十五日の朝行なわれている

十五日

○小正月―　小豆粥を食べる、女正月（年の始め多忙な女が、この日年賀に出向くことから）ともいう。

○ボロ市―　四百年の伝統をもつ世田谷のボロ市、十六日と二日つづく

十六日

△えんまの日（初えんま）、やぶ入り―　小豆飯を食べる。おえんまさまは、えんま供養といって寺に参り生涯うそをつかないことを誓った。うそをつくとえんまに舌を抜かれるといわれた

十八日

×十八日　―十五日の小豆粥を余しておいて食べる、この日小豆粥を食べると虫にさされないという。大師粥ともいう

二十日

△二十日正月―　終りの正月、元旦の朝のように雑煮餅を食べ明日から本格的に働くという誓いの日、農家に残こる

△えびす講―　えびす・大黒の神棚にお頭付の魚を供えて利益を祈る

二月

節分・三日（喜多見四丁目 氷川神社）

―豆まき、鬼やらい（ついなともいい悪鬼を払い、疫病を除く儀式）、大黒舞が行なわれる。豆がらにいわしの頭をさし、ひいらぎの枝と合わせて門口に差す。年越そばを食べる

針供養・八日（代沢二丁目 森巌寺・浄土宗）

針供養塚、森巌寺は江戸時代から淡島様と呼ばれ、淡島のお灸で広く知られた

初午（喜多見四丁目 永井家）

―屋敷稲荷のある家では初午祭りをする、稲荷様の祭り、稲荷講の初寄合（オビシャともいう、千歳地区）、子供の初午祭りはむしろ小屋をつくり食べて遊ぶ（喜多見）

八日

×オコトジマイ―十二月八日のオコトハジメと同じく目かごを出してオコト汁を食べる（千歳地区）、メカリ婆、メカリバアサンともいう。一つ目小僧がこの日訪ねてくるといい、目かごに鎌をつけて軒先やとおりに高くかかげておどかすという風習

御嶽信仰・無季節（喜多見地区）―― 狼のお札を畑や門口に張り、虫よけ盗難よけとした

十五日

×**フセギ**（厄神除）―― カツの木の札を家の軒下に下げたり、村境にシメナワを張ってそこにつるして災難疫病を防いだ。昭和十八年頃まで千歳地区にあった

涅槃会・十五日（喜多見四丁目　慶元児・浄土宗）―― 釈迦入滅のこの日寺で行なわれる法会、寺参り、浄焚供養、ねはん団子

三　月

ひな祭り・三日（給田三丁目　富岡家）　女の節供、上巳（じょうし）の節供ともいう、ひな飾り、白酒

十七日～二十三日

○**春の彼岸**―― 春分の日を中日とし前後七日間、墓参り、中日ぼたもち明けだんご

四　月

灌仏会・八日（北烏山四丁目　存明寺・浄土宗）―― 釈迦誕生日を祝して行なわれる仏教行事、花まつり、境内に花御堂をもうけ、銅の釈迦仏にひしゃくで甘茶をそそぎたてまつる（農作業に着手するにあたり魂祭を行なう習俗の変化）

八日

×**マキコガシ**―― 糠（ぬか）を煎（い）って家のまわりにまき門口に虫除のお札を貼り、団子を作る（千歳地区）

五月	**端午の節供・五日**（喜多見地区　石井、坂本、田中家）―男の節供、鯉のぼり、軒菖蒲、菖蒲湯、ちまき、柏餅をつくる	二十日～二十六日 **×田あがり正月**―田植えが終了したときの農家の一斉休業（弦巻、若林、上馬など）
	念仏講・無季節（等々力二丁目　高橋家）―月次（つきなみ）念仏、毎月当番の家に集まって念仏を勤め会食し、葬儀の時など助け合う。講には御嶽講、榛名講、大山講、三峯講、富士講、お伊勢講、大師講、成田講などの代参講や頼母子講などがあった。（砧、千歳地区でも行なわれてる） **まむし除けのまじない**（喜多見三丁目　斉藤家）―昔は四月八日にまむしよけ、蛇除けのお守りを出した。（江戸名所図会、遊歴雑記、武蔵名所図会、願懸重宝記などにもとりあげられている）	
六月	**麦刈り・棒打ち**（喜多見地区	一日

石井家）― クルリ棒、殻竿ともいい豆類、粟などの脱穀や麦打ちを行なった。代田の棒打唄が今も残こっている

○鮎の解禁 ― 多摩川の鮎漁、網打。

○大祓（おおはらい） ― 人形（ひとがた）流し、けがれをこれにつけて流せば清まるという信仰

七月

七夕祭り（喜多見五丁目　坂本家）― 七夕飾り、里芋の葉の露で墨をすり短冊に願いごとを書いて下げる。竹飾りはあとで川に捨てる風習があった、又忌服の家は七夕をたてることを忌むならいだった

お施餓鬼（喜多見五丁目　知行院・天台宗）― 密壇で光明供、塔婆に水をそそぐ、墓参り

おとろとぼし・御灯明点し

十三日（喜多見四丁目　慶元寺・浄土宗）― お盆の

一日

△オカマノクチアケ ― 盆の始まりという、新仏の家はこの日から軒提灯を出す（千歳地区）

十三日

○迎火 ― 盆の精霊を迎えるため門口で火をたく、この火を目あてに仏様が帰えってくる。

○精霊棚 ― 盆棚とも。盆の魂祭りの祭壇、棚をつくり四隅に青竹を立てちがやの縄を張り、下にまこもむしろを敷き、ナス

夜墓地で行なわれる墓施餓鬼。

川狩り・盛夏 ― 多摩川で投網打ち

の牛、キュウリの馬、位牌を置く

十五日

○送火(おくりび) ― 門口で精霊を送くるため麻(お)からをたき、精霊がナスの牛、キュウリの馬に乗って帰えるよう送火のところにおいてくるのが習わしである

十六日

△えんまの日 ― えんまの斎日、一月と同じくやぶ入り

土用

△丑の日 ― 夏やせの栄養にうなぎの蒲焼を食べる。土用餅をつく

×土用干 ― 虫干、衣類を干す

二十三日

×三日正月・ソウゴジマイ ― 宗吾正月ともいう。中日は農事休み（千歳・大蔵地区）、弦巻では八月一日から三日、上馬辺は七月三十日から八月一日だった

八月

祭り囃子 ― 囃子保存会の競演

一日

×八朔の節句 ― 畑仕事を休み、嫁は実家へ帰る

湯立神楽（喜多見四丁目　須賀神社）―　湯花神事、みそぎの一種、神前で湯を沸かし熱湯に笹の葉を浸して参詣人にふりかけたりする

十三日～十五日

△月おくれの盂蘭盆―　千歳地区、宇奈根方面は盆（行事は七月の盆と同じ）

○納涼盆おどり―　各地で盛ん

お面かぶり（奥沢七丁目　浄真寺・浄土宗）―　二十五菩薩来迎会、四年に一回の行事

上～下旬

×雨乞い―　大山へ水貰い、雨がふればおしめり正月

九　月

大蛇おねり（奥沢五丁目　奥沢神社）―　わらで作った大蛇を厄除開運を願って町内を練り歩く

二十～二十六日

○秋の彼岸―　墓参り、春の彼岸と同じ

十五夜の月見（喜多見地区）―　旧歴八月十五日、月見だんご、秋の七草

秋祭り―　中旬以後各地の鎮守で行なわれる

十　月

お猿庚申講（下馬五丁目　お猿庚申堂）―　春秋のかのえさるの日お日待をする

旧歴の九月十三日

○十三夜の月見―　十五夜と同じ、片月見は忌む

二十日

△**えびす講** ― 一月のえびす講と同じ

○**お十夜** ― この頃寺院で十夜法要、双盤念仏（双盤念仏は現在九品仏浄真寺、医王寺、慶元寺（十一月二十四日に行なっている）などで行なわれている）

三十日

×**荒神様のオタチ** ― 荒神に神酒、三六個のオミヤゲダンゴ、小豆飯を供え、オタキアゲといって古い荒神松と新藁を焼いて荒神様を送くる。このダンゴは嫁入り仕度が遅くれるといって女子に食べさせない。十一月三十日に荒神様が帰えってくる。アキアガリは農事休みで嫁はソバ粉を持って里に帰える

十一月

九日

×**イノコ** ― 亥の子、ボタモチと大根の味噌汁をつくる。荒神様の使いのエボタ蛙（オカマ蛙）がボタモチを背負って使いに行くと、大根は首を土から出し、どぼうは首をひっこめるという。

酉の日

△**オトリサマ** ― 酉の市へ行く

十五日

○七五三の祝い ― お宮参り

二十四日

○お十夜 ― 双盤念仏、念仏行進（喜多見地区）

十二月

一日

×カワビタリ ― 川浸、水神を祭る行事で餅をつく

中下旬

△煤払い ― 家中のすすやくもの巣を払う、大場代官家例は十三日、上野毛、千歳地区は八日が慣例、アンをつけたススハキ団子を作り神棚に供える（千歳地区）

ボロ市（世田谷一丁目、代官屋敷を中心に東西一キロ以上）― 現在は十五、十六日の両日と一月の十五・十六日行なわれる。

下旬

○餅つき ― 二十九日は苦モチといって餅つきを忌む、代官家例は二十三日

二十二日

△冬至 ― 柚子湯、南瓜を食べる。星まつり（喜多見不動堂で南瓜のうらない）

（社会教育課文化財係・田中隆之、倉島幸雄　作成）

映画「民俗は生きている」を見て

老人大学生感想文要約

一、明治生れの人間も時代の波に乗り、古い事は忘れ勝ちになるとき、昔ながらの習俗を守りながら生きていることは美しく子供たちの心の内に豊かな情操教育を培うことであろう。

二、現代の日本人はすべてのものに対する敬虔の念を失い物質万能、ここに社会の悲劇がある。これでよいのか、この映画で心の世界を見い出すべきだと深く感ぜしめられた。

三、大変有意義な映画です。私の故郷でも、もう昔の行事はなくなるのであろうが、このように保存できたらと羨しく思った。

四、昔にかえった心地で楽しく見せて頂いた。私も以後、文化財保護を研究して世田谷区を盛りあげて行きたい。

五、この映画をみて感激しました、よくもこうした古い習慣や行事が残されていたものだ又それを丹念に尋ねて映画にされた御苦労に頭が下がる。

六、次第に消え亡んで行く民俗を存続させるために住民の積極的な努力が必要である。

七、世田谷に永年住んでいたが知らなかった行事をこの映画により知ることができ幸でした。

大勢の方に是非見せて頂きたい。

八、　世田谷の数々の民俗行事はその土地の風習を偲ばれて面白かった、もう一度ゆっくり見たい。

九、　画面の行事が私の故郷茨城でもあり、なつかしかった、まゆ玉行事に子供の頃を思い出した。

一〇、　歴史を学ぶ者にとって昔を偲ぶ縁となることができ、未来まで及ぼすことができる大切な良い作品である。

一一、　民俗行事の数々は、親から子へ、子から孫へと受けつがれてこそ今も残っている。これをすることにより明日への幸福があると思う。年を追ってなくなるのは淋しい。